

高崎経済大学地域科学研究所

ニュースレター No.7

目次	事業報告① 公開講座	(1)
	事業報告② 地域めぐり	(2)
	事業報告③ 地元学講座	(4)
	事業報告④ 地域経営セミナー	(5)
	2017 年度第 2 回公開講演会報告	(5)
	シンポジウム実施報告「日本蚕糸業の縮小過程と 蚕糸業文化の伝承」	(6)
	私のフィールドノートから	(7)
	所員刊行図書紹介	(9)
	学生特派員報告	(10)
	地域科学研究所動静	(21)
	編集後記	(21)

事業報告① 公開講座

市民, 県民を対象とした第 38 回公開講座は, 10 月 5 日(木)から 12 月 6 日(水)までの間, 1 週間に 1 講義のペースで 10 名の地域科学研究所員(経済学部教員 7 名, 地域政策学部教員 2 名, 特定研究員 1 名)が講義を担当しました(講師・講題は別掲参照)。昨年度までの公開講座では, 5 回以上の出席者に学長名の「修了証」を交付していましたが, 今年度より 7 回以上の出席者に「修了証」を交付することに変更しました。今年度は受講者 108 名の内, 71 名に「修了証」が秋朝礼恵副所長より交付されました。7 回以上出席した人の割合は 65.7%となり, 2016 年度の 54.5%から 11.2 ポイント増加しました。地域科学研究所では, 市民, 県民の生涯学習に寄与すべく, 来年度も春季の高崎経済大学連携講座(中央公民館)と秋季の公開講座(本学)の 2 本建てで所員の最新の研究成果を提供してまいります。なお, 受講者アンケートは, 次号のニュースレターに掲載いたします。

《第 34 回公開講座》

- ①10 月 5 日(木)
黒崎 龍悟 所員(経済学部准教授)
「アフリカ農村にみる環境利用の知恵」
- ②10 月 12 日(木)
小林 徹 所員(経済学部講師)
「働き方改革－推進への課題と予想される影響について－」
- ③10 月 18 日(水)
小牧 幸代 所員(地域政策学部教授)
「異文化理解とおもてなし－イスラームを中心に－」
- ④10 月 25 日(水)
藻利 衣恵 所員(経済学部准教授)
「経営者報酬制度の歴史 －今後日本で増加が見込まれるインセンティブ報酬を中心に－」
- ⑤10 月 31 日(火)
水口 剛 所員(経済学部教授・副学長)
「年金と株とよりよい社会－年金の積立金はどうのように運用されるべきか－」

⑥11月8日(水)

永田 瞬 所員(経済学部准教授)

「日本の雇用問題を考える」

⑦11月15日(水)

新田 浩司 所員(地域政策学部教授)

「日本における移民法導入の是非」

⑧11月22日(水)

唐澤 達之 所員(経済学部教授・副学長)

「ロンドン-まちづくりの歴史-」

⑨12月1日(金)

飯塚 真弓 特定研究員(任期制助手)

「ヒンドゥー教の文化と暮らし-南インドの事例から-」

⑩12月6日(水)

秋朝 礼恵 所員(経済学部准教授・副所長)

「働き, 休み, 楽しむ-高負担社会スウェーデンを事例として-」

時間: 18時30分~20時00分

場所: 高崎経済大学 6号館 621 教室



<講義の様子 講師: 水口 剛所員>



<秋朝副所長より修了証の授与(最終回)>

事業報告② 地域めぐり

2017年度の地域めぐりは、高崎市内の製造業と農業をテーマに実施しました。

◎第1回地域めぐり「高崎市の製造業に学ぶ」

第1回の地域めぐりは、10月3日(火)に17名の市民が参加して、矢野修一所員(経済学部教授)の案内によって実施されました。

地域科学研究所では、旧産業研究所最終研究プロジェクトの研究成果『地方製造業の展開-高崎ものづくり再発見-』を2017年3月に刊行しました。この研究は、高崎経済大学附属高等学校が2014年度より文部科学省のスーパーグローバルハイスクール(SGH)事業採択校となったことがきっかけとなって、SGH事業の高崎市内協力企業を中心とした製造業企業の歩みと現状をまとめました。地域めぐりでは、昭和電気鋳鋼(倉賀野町)、キンセイ産業(矢中町)、秋葉ダイカスト工業所(大八木町)の3社見学させていただき、最後は高崎市内唯一の酒造メーカー・牧野酒造(倉渕町権田)の酒蔵を見学させていただきました。



<工場見学の様子(昭和電気鋳鋼)>

1985年のプラザ合意以降の急速な円高は、製造業拠点の海外移転を促進し、産業空洞化を招きました。そんな中、高崎市においては、様々なオンリーワン企業が集積しており、地域経済の担い手として貢献いただいています。今回の地域めぐりでは、そうした高崎市の経済を担っていただいている中小企業の現状と課題を学

んでいただきました。それぞれの企業で説明を受けた際には、参加者から質問が出されていました。実施に当たり、ご協力いただいた各企業様に厚く御礼申し上げます。



＜金子社長より説明を受ける参加者＞

◎第2回地域めぐり「高崎市の農業に学ぶ」

第2回は、11月14日(火)に19名の市民が参加して、西野寿章所長(地域政策学部教授)の案内によって実施されました。

最初に高崎市国分(旧群馬町)で生産される特産品の国府ハクサイと国分ニンジンの生産者からお話を聞き、圃場も見学させていただきました。国府ハクサイについては蜂須賀隆広氏、国分ニンジンについては眞塩光枝氏よりお話を伺いました。

国府ハクサイの特徴は、サイズが大きいことと、甘みにあります。しかし、特殊な種を使用しているわけではなく、それは黒ボク土と呼ばれる火山灰土にその秘密が隠されていました。黒ボク土には初めから有機質が含まれていたわけではなく、黒ボク土の土壌の有機成分であるリン酸を固定する性質が働き、榛名山、浅間山の噴火の後の人間、動物の生活、動植物の腐敗などにより有機質が徐々に増加して肥沃な土壌を形成したものと考えられます。榛名山西麓の旧榛名町で果樹栽培が盛んなこととも無関係でなく考えられます。なお、国府ハクサイは、大きいのが特徴ですが、国府ハクサイが人気の東京市場では核家族化、1人住まいの方々

が多いことから三二国府ハクサイの開発が進められています。

国分ニンジンとは長く細いのが特徴ですが、冷蔵庫に収容できないなどの理由から需要が減少し、栽培農家も減少したそうですが、眞塩氏が復活させ、伝統野菜を守ろうとされており、高崎イオンなどに出荷されているとのことでした。



＜国府ハクサイ農家・蜂須賀 隆広氏＞



＜国分ニンジン栽培地・眞塩 光枝氏＞

昼食後、旧榛名町上里見にて梅の加工に取り組んでおられる清水の梅を訪問し、経営者の清水重信氏より榛名における梅栽培の歴史や加工品の生産について、日本の梅栽培地の代表である和歌山県における取り組みなども交えて話をお聞きました。清水の梅では、12haの梅園で梅を栽培され、梅の加工品として代表的な梅干しを生産されていますが、蜂蜜漬けにした梅干しなど消費者の嗜好に合わせる商品開発がされていることを学びました。また、梅エキスは、病気の治療にも有効であることを知り、参加者

は梅を見直していたようです。



＜清水の梅・清水 重信氏＞

そして最後に、旧倉渕村権田で30年にわたって有機農業に取り組んでこられた(有)草志舎・くらぶち草の会代表取締役・佐藤 茂氏にお話をお聞きました。お父様から農業を継がれた佐藤氏は、夢の持てる農業を実現したいと思うようになり、自分で値を付けられる農産物を生産しようと、当時では珍しい有機農業による農業に取り組みられました。くらぶち草の会に多くの若者が修業に来て、やがて独立し、今や30数名のグループに成長しています。出荷場には、毎日、10tトラックが数台荷受けに来ているということでした。条件の悪い傾斜地を利用した有機農業は、安定した生産と出荷が実現しているようでした。



＜くらぶち草の会・佐藤 茂氏 (写真右)＞

事業報告③ 地元学講座

2017年度の地元学講座は、観音山丘陵と長野堰をテーマに実施しました。

◎第1回地元学講座

「観音山丘陵の自然を学ぶ」

第1回の地元学講座は、10月17日(火)に高崎経済大学で開催され、「観音山の自然を守るネットワークの会」代表の西野仁美氏(医師)から、同会の活動についてお話を聞きました。同会では、子供達に観音山の自然とその大切さを教えておられ、産廃処理場の開発によって破壊された現状から子供達に自然保全について考えさせています。観音山は、旧高崎市住民に身近な山として親しまれてきました。しかし、産廃処理場開設に伴う自然破壊が行われている現状があります。そうした中、同会では子供達が自然とふれあう中から、自然の尊さ、大切さを学んで欲しいと活動を続けられています。



＜講演の様子＞

◎第2回地元学講座

「『長野堰用水』主要施設をめぐる」

第2回は、11月28日(火)に実施されました。2016年度に引き続き、長野堰をめぐることとし、今回は、昨年見学しなかった大学から下流の市街地を流れる長野堰沿いに歩いて、途中にある石碑や堰について「長野堰を語りつぐ会」(会長・中嶋 宏氏)に解説していただきました。途中、請地町の長野堰土地改良区事務所で土地改良区の業務内容についてのお話を聞きなが

ら、文化センターまでの約 3.5km を歩きました。タイミング良く、家が取り壊されたことから、高崎城へ水を送る新井堰の様子が見え、長野堰沿いで今も染色業を営んでおられる仕事を飛び入りで見せていただいたりして、長野堰の歴史的役割と現状を学びました。



<長野堰沿いを歩く参加者>



<円筒分水堰>

高崎競馬場跡の遺跡発掘現場では、群馬県埋蔵文化財調査事業団の協力を得て、出土した環濠集落遺跡や土器などの説明を受け、2000 年前のこの地の様子的一端を学びました。



<高崎競馬場跡での見学>

事業報告④ 地域経営セミナー

自治体職員の研修を目的とした 2017 年度の地域経営セミナーは、群馬県庁 OB、群馬県商工会連合会専務理事・千代清志氏を講師にお招きし、11 月 8 日(水)に本学で開催しました。群馬県下の自治体職員 18 名が出席しました。

千代氏は、38 年にわたる群馬県職員としての経験を元に「地方分権時代における地方公務員の使命と役割」と題して講演され、後半は、出席者からの質問に答える形で参加者全員が地方公務員としてのあるべき姿を語り合いました。最後に、地方自治を専門としている地域科学研究所の佐藤 徹所員(地域政策学部教授)と岩崎 忠所員(地域政策学部准教授)から、これからの地方公務員の進むべき方向性についてアドバイスをいただきました。



<セミナーの様子(左から)

岩崎所員、佐藤所員、千代講師>

2017 年度第 2 回公開講演会報告

第 2 回公開講演会は 2017 年 12 月 5 日(火)に開催され、下仁田町副町長・総務省地域力創造アドバイザーの吉弘拓生氏に「現場で考える地域再生—福岡県うきは市と群馬県下仁田町での取り組みから」と題してご講演いただきました。吉弘氏はうきは市職員から 2015 年に下仁田町副町長に就任された方で、これは他の自治体の現役地方公務員を副町長として迎えるという、日本初の試みでした。

こうしたユニークな経歴を持つ吉弘氏から、

うきは市職員時代に取り組んだ、JR九州の豪華寝台列車「ななつ星 in 九州」歓迎イベント、「森林セラピー」推進プロジェクトおよび「うきはスイーツ&フルーツコレクション」、さらに、下仁田町副町長就任後に取り組んだ、動画による「まちおこし」と、ご自身が取り組んだ地域再生のプロジェクトが紹介されました。そして吉弘氏は、国による「地方創生」開始から3年が経過した現在、地域が主体となる地方創生のために、地域に眠っている資源を探すこと、さらにその核となる、未来を担う人材を育てることが重要になると主張されました。



<講演の様子>

天羽 正継 所員 (経済学部准教授)

シンポジウム実施報告

「日本蚕糸業の縮小過程と蚕糸業文化の伝承」

12月9日(土)13:00~16:30、本学にて、高崎経済大学創立60周年記念シンポジウムⅡ「日本蚕糸業の縮小過程と蚕糸業文化の伝承」を開催し、市民、県民56名が聴講されました。

地域科学研究所では、2015年3月に研究所発足記念として『富岡製糸場と群馬の蚕糸業』を刊行しました。同書では、明治以降における日本蚕糸業の発展過程について、第二次世界大戦前を中心に分析されました。戦後の衰退過程についても触れられましたが、不十分であったことから、続編として輸出産業から国内産業へと変容を遂げ、やがて衰退の一途をたどった日本蚕糸業の衰退過程を研究することとしまし

た。群馬県は、平坦地から山間部の隅々まで桑畑が広がり、農家の人々は「お蚕様」と生活を共にしたわが国有数の蚕糸地域でした。また、世界遺産を活用した地域振興のあり方が日本各地で問題となっています。シンポジウムでは、日本蚕糸業の衰退過程を政策面と需要面から捉えて農村地域にどのような変化を与えたかを明らかにして、世界の世界遺産登録物件所在地の踏査を踏まえての世界遺産と地域振興のあり方、日本各地における蚕糸資料館の歴史的展開とその意義についても考察を加えました。

報告は、「戦後の日本蚕糸業の縮小過程と要因について」高木 賢(公立大学法人高崎経済大学理事長)、「ライフスタイルの変化と日本蚕糸業の対応」西野寿章(地域科学研究所長)、「戦後における地域蚕糸業史の伝承と地域的意義」大島登志彦(地域科学研究所員)、「世界遺産の観光資源化と地域の対応の国際比較」佐滝剛弘(地域科学研究所特命教授)の順に行われ、日本蚕糸業史研究の第一人者である東京大学の石井寛治名誉教授から「近代日本の蚕糸業－戦前史と戦後史」と題して、各研究へのコメントをいただき、石井先生は「蚕糸業の灯火を消してはならない」と強調されました。

このシンポジウムでの報告内容と石井先生のコメントは、2018年3月に日本経済評論社から刊行の予定です。



<公立大学法人高崎経済大学理事長・高木 賢>



<西野 寿章 所長>



<シンポジウムの様子>



<大島 登志彦 所員>



<佐滝 剛弘 特命教授>



<東京大学名誉教授・石井 寛治 氏>

私のフィールドノートから

職場におけるコミュニケーション

若林 隆久所員 (地域政策学部准教授)

コミュニケーションが悪い。あちこちで耳にする言葉です。「風通しが悪い」や「意思統一ができていない」といった言葉も似たものかもしれません。経営学を専門とする私の調査対象である企業や職場に関していえば、「個人主義の進展」や「職場寒冷化」といった言葉が盛んに喧伝されています。企業や職場に限った話ではなく、現代においては、個人同士の関係性というものが改めて問題になっているように思います。

しかし、自分自身が日常的に行っているはずのコミュニケーションについて、私たちはあまりよく分かっておらず、かつ、無意識的です。例えば、自分の所属する組織について「コミュニケーションが悪い」という実感があったとして、「何をもってコミュニケーションが悪いと感じているのか」や「そもそもどこまで自分が組織全体のコミュニケーションを把握できているのか」について正確に答えられる人は少ないかもしれません。「コミュニケーションが大事」と言っても、「どのようなコミュニケーションがより重要なのか」や「なぜ重要だと思っているコミュニケーションが取れていないのか」ということも明確でない場合が多いようです。

ちなみに、講義の中で100人超の大学生に「部活、サークル、バイト、学校のクラス、家族などの組織におけるコミュニケーションの良し悪しをどのように測ることができるか」について尋ねてみると、SNS関連の現代的な回答が多かったこと以外では、仲の良さを測るような回答が多かったことが印象的です。もちろん、コミュニケーションや仲の良さといったもの自体が目的の場合もありますが、何らかの成果を上げる必要がある場合に、「仲が良ければ成果が上がるのか」ということもひとつのテーマです。

上述のような問題意識を持って職場におけるコミュニケーションの研究に取り組んでいるのですが、まずはコミュニケーションに関する実態調査ということで、「組織を活性化させるためのコミュニケーションは何か」ということに問題意識を持つ企業の方々（と私）で、日誌法（Diary Method）による調査を実施しました。一週間の期間、自分および他人が行っているコミュニケーションについて、毎日逐次記録するという調査です。日誌法とは言っても、現代では紙の日誌を使うわけではなく、PC上でエクセルファイルに入力して整理・分類していきます。

まだ分析途中ですが、調査を実施してみて分かったことは、①何をコミュニケーションと思うかは人それぞれ、②コミュニケーションを取る時間が限られている、③他人同士のコミュニケーションは分からない、ということです。

①は、人によって、何をコミュニケーションとして記録するかが異なるということです。対面コミュニケーションのみを記録する人もいれば、電話やメール・LINEを含める人もいました。一方、非言語のコミュニケーションを記録した人はいませんでした。

②は、当人たちが大事だと思っているようなコミュニケーションはほとんど取れておらず、業務上の報告・連絡や指示が大半を占めていたということです。その原因は、忙しくて時間がないということでした。会議や打ち合わせのような長時間の場を含めても、一回のコミュニケーションにかかる時間が5分以下というコミュニケーションの割合が約半分ということは驚くべき結果ではないかもしれませんが、しかし、短い時間では十分なコミュニケーションが取れないというのもまた事実です。

③は、そのような忙しい状況ということもあってか、他人同士がどのようなコミュニケーションを取っているのかはまったく分からないということです。一週間の期間で他人同士のコミュニケーションをひとつでも記録した人の割合は3割以下で、記録されたコミュニケーションの数も、自分自身のコミュニケーションと比較して極めて少数です。内容はもちろんのこと、コミュニケーションの有無も正確に把握できていないのかもしれませんが、この状態が一般的であるのであれば、世の人々は果たして何を基にして「コミュニケーションの良し悪し」を論じているのかという疑問も出てきます。

少人数を対象とした調査とはいえ、これらの結果は企業や職場の現状をよく表しているのではないかと思います。いかがでしょうか。

もちろん、日誌法やアンケートによる調査は、本人によって認知されたコミュニケーションだけを対象としており、客観的・科学的ではないという批判もあるかもしれませんが、最近の動向としては、社員証型の身につけられるセンサーを使ってコミュニケーションを測定しようとしていたり、電子メールやグループウェアのデータを使ったりすることで、客観的な行動データから職場におけるコミュニケーションについて解明

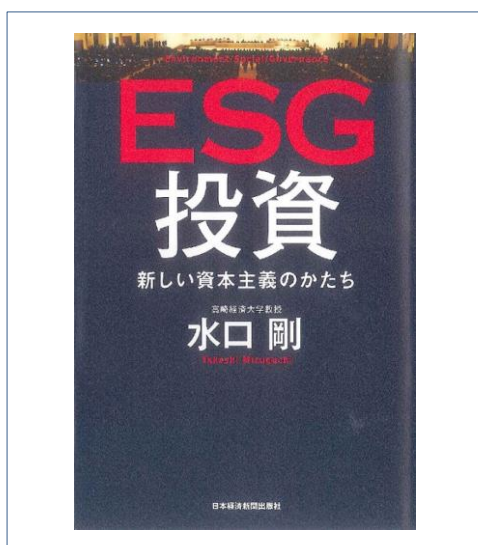
しようという研究も増えています。

ここまで職場におけるコミュニケーションの研究について紹介してきましたが、コミュニケーションに着目するには理由があります。近代組織論の祖とされるチェスター・I・バーナードは、その著書『経営者の役割』（原題：The Functions of Executive, 原著出版は1938年）の中で、組織の成立条件として、①共通目的、②貢献意欲、そして、③コミュニケーションの3つを挙げています。バーナードのいう組織が成立している状態とは、組織がきちんと機能している状態、言い換えれば、組織が活性化されている状態を指します。冒頭で述べた通り、組織がうまく機能していなかったり、活性化されていなかったりという問題が現代的な課題であるとすれば、改めて組織のリーダーとメンバー、あるいはメンバー同士のコミュニケーションを見直していく必要があるのではないかと考えています。

所員刊行図書紹介

水口 剛所員（経済学部教授）

水口 剛著『ESG投資 - 新しい資本主義のかたち』日本経済新聞出版社, 2017年, 2,200円+税



ESGとは、環境（Environment）の「E」、社会（Social）の「S」、コーポレートガバナンス（Corporate Governance）の「G」とった略称です。そしてこのESGを考慮した投資がESG投資です。10年ほど前からヨーロッパの大手の公的年金や政府系基金を中心に広がり始めました。2006年に公表された「責任投資原則（Principles for Responsible Investment: PRI）」がきっかけになりました。

日本ではなかなか注目されませんでした。2015年に年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）がついにPRIに署名しました。GPIFと言えば、国民年金と厚生年金の積立金をまとめて運用する世界最大の年金基金です。そのGPIFがESG投資に乗り出したことで、日本でも急速に関心が高まり始めました。

とはいえ、それまで伝統的な投資の世界にいた人が、いきなりESG投資と言われても、テレビのチャンネルを切り替えるように簡単に頭を切り替えられるものではありません。すると何が起きるかということ、今までの自分の常識の枠の中で、自分の常識と矛盾しないような解釈を探すという行動です。たとえば「これは、新しい投資手法の一種だ」「この投資手法を使えば、今までより高い利回りをあげられるに違いない」というように。

しかしESG投資は単に高い利回りを得るための目新しい投資手法といったものではありません。世界が気候変動対策に失敗したら、経済格差の拡大を野放しにしたら、このまま魚を取りすぎたら、森林の減少を止められなければ、私たちの社会は取り返しのつかないダメージを受ける。それが結局は投資利回りにも跳ね返ってくる。その危機感がヨーロッパのESG投資を根底のところまで突き動かしているのだと思います。結果として「資本」という概念が少しずつ

広がり、「投資」というもののあり方も少しずつ変わろうとしています。そんなヨーロッパのESG投資の考え方を日本の機関投資家にもきちんと伝えたい。そう思ってこの本を書きました。

筆者は2015年4月から1年間、大学の国外研修の制度を使ってロンドンに滞在しました。そのとき見聞きしたことが、本書のベースになっています。国外研修の機会を頂いた大学と、その間支えて頂いた教員・職員の皆様に感謝します。少し遅くなりましたが、本書が私の国外研修の成果報告書です。

学生特派員報告

佐藤英人ゼミナールの香港巡検

(地域政策学部地域政策学科3年)

今回、海外巡検として訪れた香港は、今まで私が感じたことのない、どこか懐かしいような、少し不気味で、妖しいような、何とも言えない不思議な感覚にさせてくれる場所でした。

9月1日14時頃、私は香港国際空港で無事に入国審査を済ませました。当然ですが、到着ロビーにいる方々は皆、広東語、北京語らしき言葉で話しており、日本人である私は急に心細くなってしまいました。この巡検は現地集合・解散であるため、宿までの道中はひとりきりです。心細い私は一目散に宿を目指して深水ポ(ポは土偏に歩という漢字)へ向かいました。深水ポ駅まで乗車した地下鉄は、車内も駅も清潔で、案内板は液晶ディスプレイで掲出されるなど、先進的な設備が目立ちました。

ところが一転、駅から外に出ると、薄汚れた高層建築物、頭上にひしめく漢字ばかりの看板、ところ狭しと建ち並ぶ露店が目飛び入ってきました。日本の景観とのあまりの違いに、私は思わずたじろいでしまいました。

帰国後に調べたところ、深水ポは香港の電気街であるらしく、日本で言う秋葉原のような場所でした(写真1)。



<写真1 深水ポ駅前>

ある意味飾り気のない、地元の方々が普段の生活で利用する、本来の香港をうかがい知ることができました。とはいえ、現地では心のゆとりがなく、そのような事を考えるまで気が回りませんでした。・・・。

翌日はゼミのグループ課題のために香港の郊外住宅地を歩き、夜はゼミ生と先生とともに夕食をとって、その後は香港らしい夜景を見ようと、繁華街の尖沙咀を南北に貫くネイザンロード付近を歩いてみました。繁華街の賑やかなネオンが見たかったので、表通りだけでなく路地にも入ってみたりして異国の雰囲気を楽しみました(写真2)。



<写真2 ネオンが特徴的な尖沙咀の夜景>

3日目はゼミ生とともに香港ディズニーランドを訪れました。東京ディズニーランドよりも

規模が小さく、お客さんも少ないことに驚きました。アトラクションの待ち時間が短いので、何回も同じアトラクションに乗ったり、園内を何周も歩き回ったりと、日本ではあり得ない体験をしました。

帰国して思ったことは、今まで自分の中で都会といえば、銀座や新宿をイメージしていたのですが、香港と比較すると東京の都心や副都心であっても、何となく落ち着いた街に見えるようになりました。一方、香港は人や車の往来が激しく、市内全体から活気が感じられパワフルな印象を受けました。言葉ではうまく言い表せませんが、街の持つ活気に日本と香港の大きな違いがあると思いました。

香港滞在中で異文化に直接触れることができ、私は多くの刺激を受けました。特に、自国と他国の文化を客観的に比較できるようになったことは、自分にとって新しい強みを得たように思いました。また近いうちに海外へ赴き、日本とは違う文化に触れてみたいのです。

(地域政策学部地域政策学科3年・井上 睦)

海外渡航はおろか、飛行機にも搭乗したことがない私にとって、緊張のピークは、まさに飛行機が離陸する瞬間でした。元々、高いところが苦手なので、離陸直後は怖くて窓の外を見ることができませんでした。勇気を振り絞って、恐る恐る上空からはるか下に広がる街並みを覗き込むと、あまりの高さに足元がすくむ思いをしました。しかし、そのときに見た雲の上の景色には、澄み渡る青空が広がっており、非常に美しく感じました。今でもその情景は強く印象に残っています。

手に汗握る4時間のフライトを経て、香港国際空港に降り立ってみると、案外、不安はありませんでした。それは香港が馴染みの土地であ

るように感じたからです。空港や駅構内には、見慣れた漢字(中国語)や英語で標記された案内板があったり(写真1)、日本の広告も多く掲出されていて、香港がまるで日本であるかのように思えました。



<写真1 機場駅構内>

ゼミ生と合流すべく、初めに向かったのは、佐敦(ジョーダン)地区です。地下鉄を降りて地上に出てみると、日本とは全く異なるスパイスが効いた独特な匂いと、薄汚れたビルが建ち並ぶ景観が待ち受けていました。佐敦駅に降り立ってようやく「異国の地に来た!」という実感が湧いてきたのです。

無事にゼミ生と合流した後、私たちは女人街へ向かいました(写真2)。女人街とはガイドブックに大々的に掲載されている屋台が軒を連ねる街区です。私は「ここで土産を購入するぞ!」と意気込んで向かったのですが、並んでいる商品は日本でも買えるものばかりで、少し拍子抜けしてしまいました。足を止めて店先を眺めていると、店員さんに強く商品を勧められてしまうので、うかうかしてられません。その場から立ち去る「強い心」が必要になります。

ある屋台で、私が商品を手に取って見ていると、店員さんが電卓を取り出してきました。電卓には「60」と記されていました。つまり60ドル(香港では1ドル14円ほど)で、この商

品が購入できることを教えてくれました。私は60ドルも払う価値はないと思ったので、その場を離れようと思いました。すると強く腕を掴まれて、電卓に好きな金額を打ち込んでいいと言われたのです。突然の出来事だったので、そのときはかなり動揺しましたが、私は思い切って「30」と打ち込んでみました。店員さんはその金額を見てニコリと頷き、無事に商品を購入することができました（今思うと、もっと安い金額を提示すればよかったと後悔しています）。



<写真2 女人街>

滞在中、訪れた場所は他にも多々ありますが、いずれも日本に近い雰囲気であり、落ち着いて過ごすことができました。今後も海外に渡航して、風土や慣習を日本と比較してみたいと思います。

(地域政策学部地域政策学科3年・五十嵐涼子)

私たち佐藤英人ゼミは、毎年恒例の海外巡検を9月上旬に香港で実施しました。巡検の最大の特徴は、なんといっても「現地集合・現地解散」です。したがって、ホテルや航空券の手配を自分でしなければならず、海外への渡航経験がない、まして飛行機にも乗ったことが無い私にとっては、未知の体験でした。

私が今回の海外巡検で印象に残っていることは、ゼミ生3人と共にヴィクトリア・ピークに登ったことです。巡検1日目の夜に中環へ行き

ました。そこから2階建てのバスを利用してヴィクトリア・ピークに向かいました。

その道中、バスから中環のビルや高層マンションを見下ろすことができたのです。私はその時点で、あまりの高さに恐怖を覚えました。また、バスが崖のぎりぎりを走行していたことや、バスの2階部分に木の枝が何度も接触していたこともあって、より身の危険性を感じました。恐怖を感じつつも、中環のバス停からおよそ1時間で無事にヴィクトリア・ピークの展望台に到着しました（写真1）。



<写真1 ヴィクトリア・ピークからの眺望>

そこからの眺望は、絶景の一言。白や黄の明かりを基調としたタワーマンションが手前に見えました。その少し奥には、青や赤など、さまざまな色でライトアップされているオフィスビルが、互いを邪魔せず引き立てあっていました。当日は曇りだったので、ガイドブックに記載されているような「はるかかなたに新海の山並み」は、見ることはできませんでした。それでも、手前には1時間前まで見上げていた中環のビル群、対岸には九龍半島をはっきりと見ることができました。

到着時間も遅く、夕食も済ませていなかったもので、展望台の滞在時間は20分程に留まりました。しかし、「100万ドルの夜景」と称される眺望は、蓄積していた疲労を全て解消させてくれました。

ヴィクトリア・ピークの展望台を後にした私

たちは、中環に戻るため再びバスを利用しました。しかし、バスのアナウンスを聞き取れず、降車するバス停を間違えたため、道に迷ってしまいました。展望台で見下ろしていた中環のビル群を、再び見上げながら中環を彷徨いましたが、何とかホテルに戻ることができました（写真2）。



<写真2 中環のビル群>

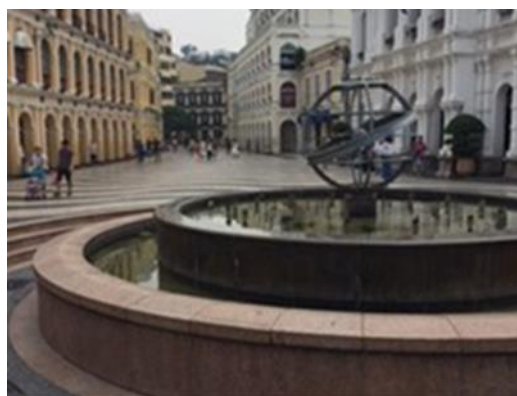
今回の巡検では、広東語を理解できずにバス停を間違えるという予期せぬ事態が発生しました。しかし、全員と協力することで、ハプニングを乗り越えることができました。ひとりではできないことも、みんなで協力すれば解決できることを実感した巡検でした。

(地域政策学部地域政策学科3年・向井佑斗)

今年度の海外巡検ではゼミ生11名とともに香港を訪れました。この巡検の特徴は、現地集合・現地解散であり、初めて海外に行く私にとって、とてもハードルが高いものでした。出発の日が近づいても海外に行くという実感を持っていないまま、出発の日を迎えたことは今でも覚えています。私が心配していたのは言葉の壁でした。空港に降り立ってまもなく、預けた荷物が見当たらないことに気付きました。慌てて空港職員の方に相談しました。その時に交わした会話は片言の英語でしたが、何とか理解してもらえて助かりました。

私は自由時間を利用して香港だけでなく、マカオにも足を伸ばしました。マカオといえばカ

ジノ！というイメージが強いですが、マカオには世界遺産に登録された「マカオ歴史市街地区」があります。私自身、富岡製糸場しか世界遺産に触れたことがなかったので、この機会にマカオの世界遺産を見学することにしました。かつてマカオはポルトガルの植民地であったため、ヨーロッパ文化が色濃く残る街並みが印象的です（写真1）。



<写真1 マカオ セナド広場>

セナド広場以外にもカトリック教会の遺跡が数多く残っており、マカオにいるのにヨーロッパ文化に触れられる「異国情緒」を感じることができました。

巡検では事前に課題が与えられました。私たちの班が取り組んだ課題は、香港と日本の郊外住宅地の違いを調査することでした。香港と日本の相違点は住宅の形態あるようです。市域の狭い香港には日本のように一戸建てがほとんどなく、集合住宅が数多く建ち並んでいました（写真2）。

確かに住宅の形態は香港と日本で違いがありますが、生活に関しては共通点が少なくないようです。私は香港に滞在している間、日本のコンビニをよく利用していました。その際、現地の方が何を購入しているのかが見えていました。すると、日本でも販売されている飲み物やお菓子を手に取っていました。香港では、自動車や家電も日本製品が数多く受け入れられる様子を

目の当たりにしました。



<写真2 香港郊外住宅の様子>

香港で食事をしたとき、私が食べた麺類はどれも美味しく、自分の口に合うものばかりでした。しかし、白米については、独特な香りがあった、あまり美味しいとは思えませんでした。帰国後、普段食べている日本の白米を食べてみると、改めてその美味しさに気付きました。また、あるお店に入ると日本と同じようにお茶が出されましたが、レシートを見てびっくり。「茶 6.0\$」と書かれていたのです。日本ではお冷やお茶は無料で提供されますが、香港ではお冷といえども有料であり、日本の常識が通用しないことを身をもって体験しました。

今回の巡検を通して、言葉は違えど意思疎通ができることに、海外へ赴く面白さがあるように思いました。

(地域政策学部地域政策学科3年・佐々木匠)

香港に到着した夜、私たちは早速“100万ドル”と讃えられる香港の夜景を見に行きました。山道を登る途中から、夜景が見え始め、周りのゼミ生は近くに座る中国人と一緒に眺めを楽しみ始めました。しかし高い所が苦手な私は、遠くの美しい景色よりもジェットコースターのように曲がりくねった険しい山道に震え上がっていました。追い打ちをかけるように、辿り着いたピークタワーのスカイテラスは、なんとガラ

ス張りの柵が崖から大きく張り出している展望台だったのです(写真1)。



<写真1 スカイテラスより香港市街>

展望台では大勢の人々が自撮り棒を掲げていました。ふと自分の横を見ると、柵から身を乗り出して下を覗き込んでいるおじさんがいました。言葉は分からなかったものの、その方に促され一瞬だけ自分もその下を覗き込んでみました。「街がここまで迫っている……」。眼下には闇に包まれた崖のような山裾と寸前まで迫る街の境目が広がっていました。しかし怖さに耐え切れません。見終わると一目散に柵から逃げ出し、その方に笑われてしまいました。しかし「怖い」「面白い」といった互いの心情が、会話とは違う形で通じ合う、とても不思議で嬉しく感じたことを覚えています。そして何より、土地が限られる中で、街が平面ではなく垂直方向に広がらざるを得ない香港の事情を肌で感じた瞬間でした。

翌日はビクトリアハーバーに向かいました(写真2)。



<写真2 ビクトリアハーバーより香港島>

集合場所の香港文化センターの横を抜けると、香港島との間にある海峡が見えてきます。ここで印象に残っているのはスターフェリーです。香

港島と九龍半島を結ぶ数少ない連絡手段となっています。昨晩はピークタワーから見下ろした香港島の夜景を今度は角度を変えて船上から楽しみました。ただし、波が荒く、香港島に着いた後も、波に揺られているような感覚に悩まされました。

今回初めて日本を離れた私は、言葉が通じず、街、交通、通貨などあらゆる日本との違いに戸惑ってばかりでした。しかしそんな時役に立ったのは、展望台の時のような「会話」のないコミュニケーションだったと思います。たとえ言葉が分からなくても、表情や声、身振りからも互いに考えや感情を伝え、仲良くなれることを知りました。同じような出会いをこれからも増やしていきたいと思っています。そのために、言語や知識を身に着けて、再び香港へ、そして他の国々にも足を運んでみたいと思います。

(地域政策学部地域政策学科3年・小山剛人)

私は海外巡検で香港に5日間滞在しました。この巡検は現地集合・現地解散が基本です。せっかく自由に行動できるので、少し早めに現地入りすることにしました。おかげで、ゼミ生と合流する頃には、軽い道案内ができるほどに成長(?)していました。以下では香港での食事と宿泊先について述べようと思います。

はじめに香港の食事についてです。私は知らない土地を訪れる際、「食」を重視しています。なぜなら、その土地の方々が、ふだん口にするものを共有することで、文化の違いを全身で感じることができるからです。香港では外食産業が発達しており、庶民向けの安価な店舗から世界に名を知られる高級店まで混在しています。実際に街中では、飲食店の看板が目飛び込んできます。と同時に独特の香辛料や調味料の香りが、街の至る所から沸き立ってきます。よい

香りとは言えませんが、この独特な香りが香港へ来たことを実感させてくれました。

香港といえば、何といても飲茶です。飲茶とは、小籠包などの点心を食べながら、お茶を楽しむ食事のことです。レストランには、「指差しメニュー」というものがあるが、言葉が通じなくても、好きなものが注文できました。ところが、写真では美味しそうに感じた料理が、実際に食べてみるとびっくり。エビチリと思われる料理を注文してみましたが、出てきた料理は殻付きのエビを大量のスパイスで炒めた物でした(写真1)。味はというとスパイスのみの味付けで、私の口には合いませんでした。コーラに何度も助けられました。私は普段コーラを飲まないのですが、この旅を通して好きになりました。



<写真1 エビチリを注文したはずが？>

次に宿泊先についてです。私は最初の3日間を一泊2千円ほどの格安ホテルで過ごしました。事前に先生から「香港は物価が高いので、中心部の高級ホテルは料金が高いよ」とアドバイスを頂いていたためです。そのホテルは高層マンションの8、9階にあり、フロントも部屋の一角にあります。このようなホテルに泊まるのは初めての経験でした。

部屋の窓からは、正面にそびえ立つ高層マンションがたくさん見え、現地の生活に溶け込めたように思えました(写真2)。何棟もの高層マンションの一室ごとに人それぞれの生活があ

るのかと思うと、なんだか感動してしまいました。私には想像つかないほどの多種多様な人々が、そこで暮らしているのだと実感したからです。



<写真2 香港のビル群>

(地域政策学部地域政策学科3年・青砥瑞季)

私にとって独力で計画をたてて、飛行機に乗り、海外へ渡る経験は今回の巡検が初めてでした。出国前日は現地に無事たどり着けるか、現地に着いた後も無事にホテルまでたどり着けるか、不安ばかり感じていました。ウキウキ・ワクワクする旅行前日の高揚感は全くありませんでした。

とりわけ、私が不安に感じていたことは、「不慣れな移動」と「言語の壁」です。しかし、香港に着くと一つ目の不安はいとも簡単に解消されました。香港には、すべての交通機関で使えるICカードがあり、このカードを改札機にかざすだけで、鉄道やバスに乗車できます。地下鉄の路線図などの案内がシンプルに書いてあり、どのようにして目的地まで行けば良いのかが容易に知ることができました。

二つ目の不安であった「言葉の壁」に関しても、あっという間に解消されました。香港は、20年前までイギリスの植民地だったので、公用語が広東語と英語です。そのため、買い物やホテルのチェックイン時には、英語でコミュニケーションをとることができました。広東語が全く理解できない私にとって、英語が通じる香港

は、海外と言っても比較的敷居の低い外国のように感じられました。

実際に香港市内を歩いてみて持った印象は、香港が「にぎやかな街」であるということです（写真1）。



<写真1 古いマンションとオフィスビル>

歩道や地下鉄の駅には人が溢れかえり、どこに行っても活気に満ちていました。「にぎやかな街」であるということは、「忙しい街」でもあります。香港は都心から郊外まで、高層建築物が隙間なく建てられており、そのような環境の中で、たくさんの人たちが活動していました。狭い歩道を早いペースで大勢のビジネスマンが歩いている様子は、とても印象的でした（写真2）。



<写真2 香港の中心商業地区>

大学の講義で「都市は人々が居住するのに適した環境とはいえない」と聞いたことがあります。普段、田畑に囲まれた生活を送っており、

都会への憧れがある私からすると、「そんなことはない」と考えていました。しかし、今回の巡検では大学の講義で学んだように、都市が過度に発達すると、交通渋滞やごみ処理の問題が発生し、人々が居住するには適さない環境に変貌してしまう有様を実感したような気がします。

香港は、誰もが楽しめる観光地である一方、居住の場としては改善の余地があるように思いました。このような感想はインターネットや書籍を読んだだけでは、抱けないものです。今回の巡検では、不安がありながらも、現地に赴き、日本では知ることのできない実状を自分の目で見ることができました。今回の経験を通し「現実を見据える」ことは、自身の考えを深めるための、有効な手段であると感じました。

(地域政策学部地域政策学科3年・大山雄史)

9月1日午前6時半、私は香港に向けて羽田空港を飛び立ちました。利用した航空会社は往復共に香港エクスプレスです。初のLCCでしたが、特に何の不具合もなく快適でした。

1日目は香港島-中環を中心に観光をしました。香港到着直後はキャリーケースを預けることが出来なかったため、傾斜の激しい香港島の移動は大変でした。それでも事前に調べておいた Emack&Bolios のアイスクリームと、泰昌餅家のエッグタルトを購入するため、現地の方々に道を尋ねながら坂の多い中環地区を歩き回り、やっとの思いでお店にたどり着いたことを、今でも鮮明に覚えています。その時に試したアイスクリームの味は cookie dough で、このお店の一押しであるカラフルなコーンも注文しました。アイスクリームにはクッキー生地がゴロゴロと入っていて食べごたえがあります。コーンは初めての触感で色ごとにフルーツの味がし

ました(写真1)。



<写真1 Emack&Bolios のアイス>

夕方、五十嵐さん、青砥さん、柳内さんと佐敦駅で合流し、香港に来て初めて本場の点心を頂きました。小籠包はもちろん、海老や豚肉、卵などを使った料理がたくさんあって、どの料理も美味しく、しかも一皿 20 ドル前後 (1 香港ドル=約 14 円) でとてもお値打ちでした。その後、雨の降る中、女人街を散策し尖沙咀から夜景を楽しみました。ギネスにも認定されている“Symphony of lights”と、9月2日までの限定公開であった“香港パルス 3D ライトショー”を鑑賞しました。中国らしい音色とリズムに乗せて、色とりどりの光が水面に映し出され、幻想的な世界が広がりました。今まで見たこともない光と音楽の演出に、言葉では表現できないような感動を覚えました。

2日目は、アーティスティックなお店が集まる PMQ (元創方) を訪れました。PMQ は、クリエイターの情報発信の場として利用されており、香港の新たなランドマークになっています。観光客は好きなクリエイターのブースを自由に出入りでき、気に入った作品を購入することもできます。

次に、香港文化中心のスターバックスで他のゼミ生・先生と合流し、一緒に食事をしました。みんなで集合写真を撮った後、マカオに足を伸ばしてギャラクシーマカオを訪れました。建物

を照らす唾然とするほど明るい光に感動しながら周辺を散策しました（写真2）。



<写真2 ギャラクシーマカオ>

初日は日本と異なる文化（ずっと音の鳴っている信号機や、時刻表のない地下鉄、甘いペットボトルの緑茶等）に戸惑いを覚えていました。しかし慣れとは怖いもので、たったの3日間の滞在でも最終日には、すっかり香港の生活に馴染んでしまいました。香港は観光客にとって過ごしやすい国です。次回は、文化や生活習慣の異なる国を訪れて、さらに見聞を広げたいと思います。

（地域政策学部地域政策学科3年・本島 蒼）

私はゼミの海外巡検で香港を訪れました。以下では、現地で特に印象的だった3点について述べたいと思います。

1点目はCrystal Jadeという中華料理店についてです。この店は香港国際空港の中にあり、入国直後に利用しました（写真1）。



<写真1 香港国際空港のコンコース>

ここで食べた小籠包は大変美味しく、もし日本にも店舗があれば、再訪したいと思いました。しかし、調べてみると、この店はシンガポールにこそ出店しているものの、日本には出店していないようです。香港とシンガポールは同じ中華圏に属し、言語など共通する文化をもっているので出店しやすいのかもしれませんが。優良な多国籍企業が日本に進出しやすい環境とは何か、考えさせられました。

2点目は香港市内を走る地下鉄 MTR についてです。私が利用した MTR の駅には、ホームドアが設置されていました。日本では大都市の鉄道でも、ホームドアが設置されていない駅をよく見かけます。鉄道に対する安全意識は香港の方が日本よりも高いようです。「日本の鉄道は世界一安全」という考え方は、自分の思い込みであったようです。一方で MTR には不満もありました。それは座席が金属製で、座り心地が悪いことです。この点では、座席にクッションがある日本の車両の方が、親切な設計だと思いました。

2点目はビクトリアピークへの道のりと、山頂から見た夜景についてです（写真2）。



<写真2 100万ドルの夜景>

山頂まではバスを利用しました。曲がりくねった道を猛烈な勢いで駆け上がるバス。体が激しく揺さぶられました。さらに小枝が天井に当たる度に、「バキッ！」と強烈な音がして、まるで何かのアトラクションに乗っているようでした。香港のバスは、一刻も早く目的地に到

着することを最優先にしているようです。しばらくして夜景が見え始めると、車内から大きな歓声が上がリ、私も後ろの席の中国人乗客と一緒に、「ワーオ！」と声を上げてしまいました。山頂ではピークタワーの屋上から、「100万ドルの夜景」を思う存分鑑賞しました。あまりの美しさに言葉が出なかったのを、今でも覚えています。あの素晴らしい眺望は、一生の思い出となりそうです。

今回の巡検では、飲食店や公共交通機関での出来事を通して、文化の違いについて考えさせられました。実際に現地を訪れて、異文化に触れなければ、このような経験はできなかったはずです。インターネット上の情報を鵜呑みにするのではなく、現地に赴くことの大切さを知った巡検でした。

(地域政策学部地域政策学科3年・野島大暉)

今回の巡検の目的地は香港でした。私は帰りの便をあえて上海経由にし、乗り継ぎ時間を利用して観光をしようと考えました。以下では香港・上海双方の高速鉄道を取り上げ、比較してみようと思います。

まず香港の地下鉄ですが、乗車方法は日本と似ていて、最初に自動券売機で切符（使用後返却式のICカード）を購入し、その切符をタッチ（出場時は挿入）して改札を通過します（写真1）。

ところが、今回の香港の旅で最後に乗車した空港直通列車を降りた後、驚いたことがありました。なんと改札を通らずに空港ロビーに通ってしまったのです。日本でも無人駅など、改札口がない駅は存在しますが、このように主要駅であるにも関わらず、改札口がないのは極めて異例ではないでしょうか。その理由が気になって調査しようと試みましたが、空港に着いたの



<写真1 香港の地下鉄（迪士尼線）>

は夜遅くで案内所窓口はすでに閉まっており、また帰国後に検索した文献に関しても理由まで記述されたものは存在しませんでした。そのため、機会があればぜひこの謎を解明したいと思います。

次に上海の鉄道ですが、私は空港から都心まで上海マグレブトレイン、いわゆるリニアモーターカーを利用しました。こちらは自動券売機ではなく、有人窓口で切符を購入しました。しかし、窓口の案内表示には英語表記が少なく、ほとんどが中国語で書かれておりとても困惑しました。当初は1日乗車券を購入する予定でしたが、言葉がうまく通じなかったため、やむを得ず通常の乗車券を購入して、なんとか乗車することができました。ちなみに乗車運賃は40元(日本円で約700円=執筆時レートで計算=)とかなり安く、物価の相違はあるとはいえ、この価格でこのような高速列車に乗ってしまうことにとっても驚きました。また、リニアモーターカーという名の通り、そのスピードにも圧倒されました。列車は駅を出発してわずか3分強で最高速度の時速431kmにまで達し、乗客からは歓声が上がっていました。空港から次の駅までの距離は約30km、日本に置き換えるならば、東京から横浜までの距離をわずか8分で走破してしまいました（写真2）。



<写真2 上海マグレブトレイン>

このように、日本と同じアジアの都市である香港と上海ですが、鉄道だけでも実際に乗車して驚く部分が多数ありました。自分の足で現地へ行き、自分で体感する重要さを、身をもって学ぶことができたと思います。

(地域政策学部地域政策学科3年・鈴木結雅)

地域科学研究所動静

- ・11月22日、蚕糸業プロジェクトの研究会を開催しました。12月9日開催の高崎経済大学創立60周年記念・地域科学研究所シンポジウムⅡ「日本蚕糸業の縮小過程と蚕糸業文化の伝承」に向けて、各プロジェクトメンバーの研究発表並びに意見交換を行いました。
- ・今年度からスタートした研究プロジェクト「長野堰の成立と歴史的役割に関する研究」では、立命館大学名誉教授の吉越昭久先生をアドバイザーに迎えています。第2回地元学講座(本ニュースレター4ページで紹介)にもご同行いただくのに先立ち、11月27日に榛名湖から頭首工に至る上流域(昨年度第2回地元学講座の行程)をご案内しました。

編集後記

今年度、「地元学講座」「地域めぐり」の事務を担当しました。内容は事業報告に記載のとおりですが、熱心な市民の方々にご参加いただき、どのイベントも盛況のうちに終了しました。特に、現地見学を交えた学習では、積極的に質問される参加者が多く、講師の方々や地域めぐりで訪問した企業、農家の方々との話が尽きない様子でした。アンケートの結果からも満足との声を多数いただき、事務局として大変嬉しく思います。

高崎に来て丸10年が経ちました。群馬の風土や慣習に馴染んできたと思っていますが、テレビや雑誌などで紹介されているのを見ると、まだまだ知らないことがたくさんあると感じます。今回取り上げたテーマ(観音山丘陵、長野堰、市内製造業、市内農業)も然り、このイベントを通じてより深く、その歴史や現状について知ることができました。職務を通じてこのような経験ができたことに感謝しています。(KT)

高崎経済大学地域科学研究所

ニュースレター No.7

発行 2017年12月28日

群馬県高崎市上並榎町1300(〒370-0801)

TEL(027)344-6267 FAX(027)343-7103

E-mail : chiikikagaku@tcue.ac.jp

©TIRS